
文房具売り場の遠野さん

まめご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

文房具売り場の遠野さん

【Nコード】

N79670

【作者名】

まめご

【あらすじ】

大型書店内の離れ小島、文具売り場で働くアルバイトの遠野さんと愉快的仲間たち。

この話はフィクションです。実在の会社、人物、他諸々とは一切関係ありません。ないんだってば。 T I I N A M Iより転載作品、一部改稿。

ラッキーアイテムは茶そば！

「今日の最下位は、ごめんなさい…しし座さん！八方美人で孤立する可能性あり！今日は脇役に徹して。ラッキーアイテムは茶そば！」

テレビから流れる軽快かつ安っぽい曲と共に、可愛らしくかつ甘えたような声が高らかに宣言した。

しし座の遠野さんはワシワシと歯を磨きながらフンと鼻を鳴らす。接客業が八方美人じゃなくなったらクレームになっちゃうよ。

ラッキーアイテムって誰がどうきめてんの？

大体、鼻にかかった甘い声で「ごめんなさい」なんて言われてもさあ。

ブツブツ呟きながら家を出る支度をする。

玄関を開けると冷たい風が直撃した。

遠野さんは本屋でアルバイトをしている。

都心の一等地に構える老舗書店は900坪の面積を誇り、店内で迷子になる客も多い。

約80万の蔵書が棚にぎっしりと詰まっており、1日の来店客数は3万人とも5万人とも言われる大型書店だ。

が、彼女が働いているのは、主役の「本」に携わるカウンターではなく、「奥座敷」もしくは「離れ小島」といわれる一番奥に位置する文具カウンターだった。

勿論、遠野さんは文房具を売りたいがためにここにはいったんじゃない、と力説する。

「本が好きだから本屋さんに入ったのに、文房具だなんて！」

それでも住めば都、慣れれば何とやら。気が付けば3年の月日が経過し、今では立派にベテランとしてふてぶてしく小生意気に育って

しまった。

カウンターでぼけつと客待ちをしている遠野さんに後輩の一人、大橋嬢が声をかけた。

「今日もヒマなんですかねえ」

「今日と言えば、あたしのラッキーアイテムは茶そばらしい」

「は？」

「茶そばってどこに売ってんの？それを食べたらラッキーになれるの？」

説明を聞いた大橋嬢は可愛らしい声を上げた。

「違いますよう。ラッキーアイテムってものは常に携帯してなきゃいけないんですよ」

「えー」

じゃあさ、じゃあさ、じゃあさ。

蕎麦片手に「いらっしやいませ」とかやってさ、蕎麦汁がかつてお客さんに怒られるんだよ。全体朝礼でさ、店長にさ「こういう事例があつたので蕎麦はカウンターに持ち込まないように」とか言われたりしてさ。

それ滅茶苦茶恥ずかしいでしょうねえ。

そんなときやあたし、下向いて知らんぷりしとくよ。

きやつきゃつきゃ。

「…ってんなわけあるかあ！」

不毛な会話は遠野さんのノリツツコミと、後ろから聞こえた社員の北さんの咳払いで終了した。

ところが占いというものはどうも侮れないらしい。

季節の変わり目という時期は、なぜか不可解な人がやってくる率が高い。

そしてこの日、遠野さんはことごとく不思議さんたちにクリティカ

ルヒットした。

お客さまは神様です。でも販売員だって人間なんです！

「今日は変な奴が多いなあ」

てんでこ舞いになってしている遠野さんを眺めながら、課長が他人事のように一人ごちた。

遠野さんと大橋嬢がその髪型から「プチアシベ」と命名した49歳のおっさんである。

「寒くなつたから中（店内）に入って来たのかなあ」

「そんなこと言っていないで、助けてあげて下さいよお。一応、課長、上司じゃないですかあ」

そういう大橋嬢もテンパっている遠野さんを、課長や他のバイトと共にカウンター内で見物している。

「むやみに首を突っ込まない性格なの。おれ」

ああ、だからそんな歳になつても未だに課長なのね、という声を大橋嬢は心の中に封印した。

「やっぱ今日、茶そばいるわー…ふおう！」

へ口へ口になつて帰ってきた遠野さんは、故スーパースターのような声を上げて大橋嬢と課長の視界から消えた。

「と、遠野さん！？」

慌てて覗きこむと、カウンター前の何も無いところですっ転んだらしい。

尻持ちをついている状態で、恥ずかしくてどうという顔をしていいか分からないように口をパクパクさせていた。

「せめて足、足は閉じてください。ぱんつみえますよう」

「毛系のぱんつはいているから大丈夫…」

そういう問題じゃない。

「色気ねえ。いい歳なんだから、ぱんつくらいシルクをはけ」

「カウンター前でそういう話をしない！」

社員の北さんが呆れたような顔で仁王立ちしていた。

働いているんだから、こういう日だってあるさ。

遠野さんは自分を自分で励ます。

せめて今日のビールは、発泡酒じゃなくていいビールにしよう。

金色の缶につこり笑った恵比寿さまを思い浮かべて、遠野さんは幸せな気分になった。

茶そばなんかよりも、よっぽどいい。

一人頷いて退勤のタイムカードを押す。

その思いに罰が当たったのか、帰りの電車が1時間遅延して再び往生するはめになることを、遠野さんはまだ知らない。

バカッブル選手権

「はぁ眠い。仕事辞めたい午後三時」

今日も今日とて、暇な文房具売り場。

「年末年始が嘘のようですねえ」

隣で大橋嬢も深く頷く。

年末年始。

販売業においては一番の掻き入れ時の時期。

大勢の人が街に繰り出し、離れ小島であるはずのここにも大量に押し寄せてきた。

「カウンターお願いしまーす!!」

「手帳のお問い合わせお願いしまーす!!」

「お次お待ちのお客様どうぞー!!」

売り場はさながらバトルフィールド。

「上野! 電話出る前に前に出る!!」

「手帳カタログ誰かどこかに持って行きました!?!」

「カウンターお願いします!!」

「遠野さん! このカードの在庫どこですか!?! てか50枚ってストックあります!?!」

「レジが動くな! 案内なら俺が行く!!」

「カウンターお願いしますっっていつてるだろうがあ!!」

「次長課長はどこ行っただ!!」

「次長は行方不明です!!」

「課長はB2(トイレ)行っただま帰ってきません!!」

「あんの俳諧老人どもがあああ!!」

一月も末になり、ようやく売り場も落ち着いた頃、本日は楽しい新年会である。

といっても内輪だけの集まりだ。

「二月入ってから新年会ってどんなけ遅れてんだよ。しかもいつもの居酒屋だし」

「いーじゃん別に。安くて美味くて早いんだもの」

のっそり横にやってきたのは村田君。遠野さんの二カ月前先輩である。まだ入りたての頃、色々教えてくれた恩人でもある。

この人がいなかったら、三日でやめていたかもしれない、と遠野さんは思っている。おかげで今では上司に「いやブー」と口答えするほど立派に育ってしまった。

「さーで、今日は飲むぞー。それまで体力温存だ！　というわけでストック行つてきまーす」

踊るような足取りでカウンターを出る遠野さんを見て、村田君はため息をついた。

「いいか、あいつに日本酒を吞ませるなよ。えらいことになるからな」

はあ、と大橋嬢は首をかしげる。

「そういえば、遠野さんっていつもビールと焼酎ですよ。日本酒のんだらどうなるんですかあ？」

「一回目は俺の膝の上に乗ってきた。二回目は上野をグーで殴った」

「……酒乱ですね」

「酒乱だよ」

これから起こる悲劇を、村田君はまだ知らない。

「お疲れさまでしたあああー！！」

勢い余ってガンとぶつかるジョッキが10個。

居酒屋「満天」でかなり遅い新年会がスタートした。

全員、そこそこいける口である。競り合うようにビールを流し込んでいるうちに、あっという間に酔っぱらいの集団が出来上がった。

どこをどう経過したのか、彼氏彼女の話になった。まではよかった。

「はい、議長！　僕はここにバカップル選手権を開催したいと思

います！ 一位は支払いナシってゆうのはどうでしょうか！？」

お調子者の上野が手を挙げると、間髪いれず大橋嬢も手を挙げた。

「はいはいはい！ 一番手、大橋行きますう！」

付き合つてまだ一カ月経っていない彼と彼女は、たまに駅構内で追いかけてこを繰り広げるらしい。しかも「どろぼー！」と叫びながら。

「迷惑だ！ なんてはた迷惑な人種なんだ！！」

「えー。結構楽しいですよ。みんなびっくりしてこっちを見るんです」

そりや見るだろうよ！ よい子のみんなはまねしちゃ駄目だよ？

「二番手、行きます」

隅っこに陣取っていた遠野さんがグラスを挙げた。すでに焼酎口ツクへと移行しているらしい。

彼氏と同棲している遠野さん、一緒にお風呂に入っている時だった。身体を洗っている彼氏の腹の肉をつまんでみると、

「お、おやめくださいませ、遠野殿」

と恥じらうではないですか。

「よいではないかー。よいではないかー」

そのうち二人で

「殿中でござるー。殿中でござるー」

と仲良く叫んでいたそうなの。

「馬鹿だねー。呆れるくらい、馬鹿だねー」

「バカップル度は大橋嬢の方が上だな」

「ちっ」

「わたしは和泉君を推薦します」

落ち着いた声で、社員の北さんが拳手をする。

「僕ですか？ 何かありましたっけ？」

和泉君は男前である。

いつも落ち着いて貴公子然としているその姿は、韓流ブームの火付け役になった、かの俳優に似ており「離れ小島のぺ」と呼ばれている。

「雨の話」

「雨…？ ああ、あれですね」

小さな劇団に所属している和泉君、ある雨の日のことだった。

「雨だね」

「雨ね」

隣の特約団員の彼女も微笑んで答えた。

そのまま、降りしきる雨の中、傘を片手に二人でクルクル踊っていたらしい。

「…バカップル！ バカップルがここにいるよ！？」

「バカップルとは心外な。いかに内面を表現するのが役者の…」

「和泉君の劇、見に行きましたけど、インにこもっていて意味が分りませんでした。なんか、独りよがりでおナニーって感じ」

ああ北さん、酔っ払ってますね？

「芸術なんてものは、所詮オナニーなんですよ」

「違います！。演劇に関してはいかにエンターテイメントまで昇降させるかなんです！」

「そこ、そこ！ 高尚かつ下品な話をしない！」

「村田君は？ 彼女いるんでしょう？ 何もないの？」

「俺は……」

「あーるーよーねー」

沼の底から這い上がる魔女のような声が聞こえて、村田君は寒気がした。

遠野さんだった。その片手に握られているものは…。

「誰だ、奴にポン酒を与えたのはっ！？」

「自分で注文してましたよ」

「村田君ねーえ。音大で声楽やっている彼女が、ロミオとジュリエ

ツトやっていて、ジュリエットにシンクロしすぎちゃって、振られたんだよねー」

ああああ。

空気が凍った。

「あっちゃんはおミオぢやない!!」

それが彼女の最後の言葉だった。

おミオじゃないよ、俺。どうしろっての!?

白タイツにかぼちゃパンツをはいたらいいの!?

あまりのショックに、遠野に愚痴った俺が馬鹿だったよ。ああ、馬鹿だったさ。

遠野さんは半年間、沈黙を守っていたが、酒の力で瓦解されてしまったらしい。

「……………まあ、飲みましょう!」

「そうですね。ジュリエットなんてこの世に星の数ほどいるんですから!」

「いるのか!? いるものなのか!??」

その後、村田君はやけ酒しつつ、遠野さんにデコピン三連発で報復。優勝者に決定したものの、全然、全く、これっぽっちも嬉しくなかった。

翌日。

遠野さんは、鏡に映った自分のデコを見て、久々にやってもうたと後悔したそう。

クリスマスなんか大嫌い（前書き）

幸せの象徴も人によっては悲哀交々（こもこも）。

クリスマスなんか大嫌い

「夏がきたよ」

毎度おなじみ大型書店の離れ小島文具カウンター。

レジ当番で親機の前に座っている遠野さんが唐突に呟いた。

「ねー、毎日暑いですねえ。やんなっちゃう」

大橋嬢の声は届かなかったらしい。

「夏がきたよ。夏がきたよ。夏が……ヒッヒッヒッヒッ」

「かちよーかちよー。遠野さんが壊れましたあー」

「暑さで脳がわいたんちゃうか」

「七月といえば、クリスマスカード発注時期。悪魔の季節にございます」

「ばーか」

うつろな目をして遠くを見る遠野さんの頭を村田君がボカンとはたいた。

「痛いな、何をする」

「お前が自分で自分の首を絞めてんだよ。自業自得ともいう」

「正論を言う男って嫌いよ。もう泣いちゃうんだから」

「頼むからそのしゃべり方と嘔泣きをやめてくれ。本当に気色悪い」

カード業界の一番の売上時、それはクリスマスカード。私製年賀も合わせて大々的な見本市を各会社が行う。そこに遠野さんは各卸業者と出かけて大量に発注しなければならないのだ。

「支払う必要のないカードで買い物しているような感じでね。そりやもう最初は調子こいた」

さあ、好きなものをお好きなだけどうぞ！！

展示場いっぱいに並べられたカードは各社趣向を凝らして定番物からはやりのキラキラ系。

業者も商売である。おだてられのせられ、猛烈な勢いで木に登った

遠野さん、

「じゃあ、この棚右から左まで全部？」

「各20枚で、あ、いや40枚で？」

どーせ余っても返品きくんだ、いっとけいっとけヒィアウィーゴオウ！！

とばかりに一社に限らず各社でかました。かましまくった。

展示会以外でも、カタログを渡されて発注するものもある。

クリスマスカードだけでもキャパオーバーなのに、私製年賀とぼち袋もトリプルでお見舞いされてもう何が何だか分からない状態。

勿論、それらはすぐに納品されるわけではない。

10月下旬。

「なんじゃこりゃー……！！！」

仕分け場（という名の通路）に積み上げられているのは、己が発注したカードたち。

何パッキンあるのねえこれ、誰がこんなに発注したのねえこれ。

段ボール10までは数えたが、それ以上は怖くなってやめた。

「かちよーかちよー、どうしましょう。置く所がありません」

「遠野、お前、もうここで暮したら？ いい感じに囲まれているぞ」
取りあえずB4（一応倉庫。店内事務所と密やかな場所取り合戦が繰り広げられている）にぶち込んでおこうというわけで、ボテ車（台車のでかい版。別名ミドリのガラガラ）で

「……何往復したかなあ……」

11月上旬。

再び遠野さんに地獄が待ちうける。

立ち上げ当日。狂ったようにパッキンを開けて、鬼のように棚に突っ込んでゆく。

「明らかに1日で2キロは減った」

クリスマスが近づくにつれて、カードの回転も速くなる。それでも在庫は大量にありストックに上げたものの、邪魔者扱いされている。繁忙期、大量にストックを抱えているのは遠野さんだけじゃないの

だ。

ある日、遠野さんはふと思い立ってB4の倉庫へといった。迷路のようなダンジョンをポテポテと進み、倉庫の片隅にある宝箱（否段ボール）を開けてみると。

宝箱はミミックだった！

「ぎゃーーーーー！！」

クリスマスカードおーーーーー！！

こんな所に忘れられたクリスマスカードがーーーーー！！
慌ててふたを閉めて逃げ帰った遠野さん。

でも無かったことには出来ない、翌日早朝出勤した。

クリスマスが終われば今度は返品作業が待ち受けている。

早く！ 早くこいつらを送り返さなければ皆様、正月休みに入ってしまうー！！

同時進行で私製年賀とぼち袋の拡大。ちなみに官製年賀（切手付いている方）は郵便局の兼ね合いあるので遠野さんの担当ではない。これ、毎年換金目的でよくパクられる為、警備の人が付いています。一度、10万以上やられたことがありました。捕まっただけだね。

遠野さんにも学習能力はある。

2回3回と繰り返している内にコツの様なものも掴んできた。

ただ、相変わらず調子に乗って展示会で大量発注するクセだけは健在のようで。

「一昨日、。。。の展示会行ってきたんだよ……」

「またやったのか」

「てヘッ やっちゃった？」

「だからきしよい。むしろ怖いからやめれ」

10月下旬。今年も遠野さんは叫んだ。

「これがバイトの仕事かああ！！ 時給上げるや紀伊。屋！！」

「クリスマスなんか大嫌いだー！！ 誰だこんな概念作った奴は

！！」

魂のシャウトを。

マップにエプロン、有か否か（前書き）

「アイ、ハブ、ア、ドリーム」

マップにエプロン、有か否か

「わたしには夢がありました」

「何ですか、その英文直訳みたいなセリフは」

文房具カウンスターご用達居酒屋「満天」…ではなく、多少こじやれたチエーン店「飲み処タントナ」の一角。遠い目をして語る山田さんに遠野さんはオムライスをモクモクと食いながら突っ込んだ。

「やめてくださいね、いつか黒人の子供と白人の子供が、とか言わないでくださいね。で、どんな夢だったんですか」

「帰ってきたダンナに『あなた、ごはんになさる？ それともおふろになさる？ それともあ・た・し？』と笑顔で出迎えることを」
「ぶはっ！！」

思わずむせた遠野さん、瞬時に堪えた現米粒元オムライスは路線変更、鼻から噴出した。

「いやだ、遠野さん。汚い」

「えほえほげほっ……！ や、山田さん山田さん、一つ聞いていいですか」

「なによ」

「おいくつでしたっけ？」

「四捨五入して四十歳」

山田さんは月に一回、東京からやってくる株式会社キケロの営業さんである。ロングヘアーにピシッと決めた黒スーツ、性格はいたって男前。担当絡みで仲良くなり、今では遠野さんが「姉御」と呼んで慕っている人物だ。

課長曰く「一皮むいたらちっちゃいおっさんでくるんちゃうか」
村田君曰く「むく向かないの問題じゃない、あれは真正正銘のおっさんだ」と評される遠野さん、瞬く間に山田さんと意気投合し、今では大阪に来るたびに二人で飲みに行く。

「夢はなぜ潰えたんですか」

「エプロンが高かったの」

それをやりたいがために山田さんは百貨店にエプロンを求めに行きたらしい。

「一枚五千円くらいしてさ。馬鹿らしくなってやめた」

「そんなん、ロフ。に行ったらもつと安く売ってますよ」

「あんな安物のペラペラ買えるか。第一短すぎ」

遠野さんは首を傾げる。

全裸にエプロンオンリーなんだから、普通見えるか見えないかのきわどい所がいいんじゃないの？

「アホか」

山田さんは一言で切り捨てた。

「誰がマッパにエプロンなんて言った。四十女がそんなことしてごらんない、笑い話にもならんわ」

「ああー。すみません、勘違いしてました」
でもさ。

「エプロンでお出迎えと行ったらそりゃマッパはお約束でしょう」

「あーのねー、遠野ちゃん」

にーっこり笑ってこっちを見つめてくる山田さん。その笑顔が怖い
です。

「『ごはん、おふろ、あたし』の三択でメシ、フロっていわれたら
どうするー？ お洋服着ていたら笑って終わりだよねー。でもそ
れでマッパだったらー？ はずかしいよー。いたたまれないよー。
殺意さえ生まれちゃうよー？」

「で、でもそこはダンナさんもノッてくれるのでは」

「甘い！ 甘いわ、この小娘が」

ああ、山田さん。酔っぱらってキャラが立っていませんね？

「お付き合いを初めて三カ月。もしくは結婚して三カ月。これはラ
ブラブ期間でしょう」

ぐい、と指四本付きたてられて遠野さんは頷いた。

まあ、遠野さんも酔っ払っていますね？

「だがしかし。恋愛ボルテージというものは——あ、すみません。鬼殺してください——年月と共に下がってゆくものだ」

「それは分かります——あ、二つお願いします——全身全霊で恋愛するのってしんどいですものねえ。年がら年中恋しているのはただのヒマ人かサカリのついた若人ですし」

「永遠の愛がもてはやされるのは、それが幻って分かっているからよ。愛も恋も、時とともに変化していくのが当たり前じゃない」

「おお、山田さん。大人の発言」

「大人ですから」

ふふんと山田さんは笑った。

「その大人がフリフリエプロンでご主人様をお出迎えしたいとか言っちゃう訳ですね。それはあれですか。ネタとしてですか、それとも本気でですか」

「両方。ねえ、男に強制されたにしろ、自らにしろ『は……恥ずかしいよ』とか言いながら結局はやっちゃう女をどう思う？」

「うーん」

遠野さんは腕を組んで考えた。

自分だったら死んでも無理だ。身削りギャグにしても絶対する自信がある。

「は？ お前なにやってんの？」

など彼氏に絶対零度の眼差しで見られたら、もう生きていけない。

「あれですかね、悪者に捕まったお姫様を助けに来てくれた恋仲の騎士が、目の前で悪者たちに切られてボロボロになっていく様を見守っているのとおんなじなんですかね。『もうやめて、リグナルド！（誰だよ）私のためにそんなことをしないで、あなたのほうが死んでしまおう！』と叫びつつも『男にここまでさせてしまおうわたしふふふ』とか内心思っているのと一緒になんですかね」

「回りくどい例えだけど、そう！ そんな感じ！」

うん、と山田さんと遠野さんは頷きあった。

「どんなに清纯な顔をしていても、マッパにエプロンをやる女は醜い乙女心を持っているということじゃ」

「しかしそれを非難することはできぬよ。誰しも女である限り乙女心はフォーエバーじゃからの」

そして二人はくい、と鬼殺しを飲み干した。

話はそれからごんごんと進み、「だいたいマッパにエプロンを強制する男なんざ、ろくなもんじゃねえ」道筋を通過した拳句、「五千円で挫折するんならたいした夢じゃないね」という結果に落ち着いたのだった。

ドリームクラッシャー（前書き）

遠野さんは酒乱です。

本日壊したのは、男たちの夢。

ドリームクラッシュ

居酒屋「満天」に集うは二人の女と二人の男。

某大型書店の文具売り場のアルバイト、遠野さんと大橋嬢、村田君と上野（こいつのみが呼び捨てなのは、そういう扱いだからである）だった。

発端はストックでの遠野さんの絶叫。

「これがバイトの仕事かあああ！！」
時給上げる紀○国屋あああ
あ！！！！」

偶然、横にいた村田君が慌ててその口を塞いだ。ストックとはいえず、売り場とカーテン（もどきのボロ布）一枚で隔てられているスぺースである。

上司に聞こえれば叱咤ものであるが、幸いなことに社員の北さんはお休み、次長課長は、今日も元気に徘徊中。

グリーディングカードやレターセットを担当の遠野さん、季節の入れ替え作業でついに切れてしまったらしい。入荷する商品を決め、その入れ替え作業をし、返品処理するのも担当者ただ一人であった。おおよそ十社からなる数々の便箋だの絵葉書だのちまいました。それらは、卸の兼ね合いもあってルートが非常にややこしい。

その点、村田君の担当は楽だ。

大手メーカーの在庫を確認し、減っていればパソコンで発注するだけだし。

まあ、商品が無数に点在しすぎて慣れるまでが大変だった。それでも一時期の紙の値上げで、痛い目を見た。

全てのノート、メモ用紙、便箋他諸々、値段をはがして、新しいプ
ライスを狂ったようにラベラーで打ち続けたのも、今となってはい
い思い出だ。

「村田君」

「ああ？」

いきなりくるりと向き直った遠野さんに、村田君は胡散臭げに返事を
をする。

「君は今朝、満天のから揚げ食いたいってゆったよね」

「…それいったのは上野だぞ」

「仕方がないな、村田君。付き合ってあげよう」

「飲みに行きたいなら飲みに行きたいって素直に言え。ただしな、
お前がポン酒を頼んだら俺は速攻帰るぞ」

前回、遠野さんは日本酒を飲んで酔っぱらい、村田君のブローケン
ハートに塩をねじ込んだ。

「へいへーい」

で、所変わって居酒屋「満天」である。

嗅覚の鋭い大橋嬢と上野もくつついてきた。

「いやあ、目の保養だねえ」

壁に貼られているポスター（ビキニのおねいさんがジョッキを持っ
て、にっこり笑っている）を眺めつつ、おしぼりで手を拭きつつ、
遠野さんが鼻の下を伸ばした。

その姿、おっさんの如し。

「あれ、上げ乳ですかねえ」

「いや、本物だろう」

「僕は巨乳好きです！」

「聞いてねえよ」

やってきた四つのジョッキは瞬く間に空になり、しばらくはお代わ
りや注文で忙しかった四人の会話は当然、仕事の文句、愚痴、そし

て不満。遠野さんはすでに酔っぱらっている。

その内、ポスターの巨乳おねいさんも相まって、乳談義に話は移行した。

「たわわに実るほどが理想です！　こう、走ったらプニンプニン揺れるみたいな！」

「ないより有るに越した方がいい」

「そうかなー」

力説する男子陣に対し、女子二人は首を傾げた。

「所詮は脂肪ですよ」

「デカ乳がノーブラで走るとめちゃくちゃ痛いんだぞ。根元切り取られるくらい痛いんだぞ」

「安定しないのが一番つらいですよねえ」

「お前らに何が分かるってんだよ」

分かるもん、と頷く女子二人。

「あたし、Cカップですよ」

「あたし、F」

えふ！？

思わずA B C D…と指折り数えてしまった村田君と上野。

「…こんなおっさん女が巨乳！？　なんという宝の持ち腐れだ！！」

「いや、そんなあるように見えませ…」

叫んだ二人の顔面におしぼりがダブルでクリティカルヒット！

「いいことを教えてあげよう、男子諸君」

振りかぶった状態の遠野さんが体勢を立て直し、チチチ、と人差し指を振った。

人間、年を取れば筋肉は衰えてくる。特に胸を支える大胸筋は衰えやすく、さらに脂肪はそこから減少してゆく。つまりは。

「巨乳も年を取れば垂れ乳に。シム。ケンのコントに出てくる婆さ

ん（お風呂場でえっよつこらしよと自分の肩にしわしわの乳をかける）のようになるのだよ」

「いやあああああー!!」

村田君と上野は想像をしたくないものを想像してしまつて、手にと手を取つて絶叫した。

「そんなことはない!」

「ムチムチプリンは永遠に不滅です!!」

「えー。でも気持ち悪くないですかあ？おばあちゃんの顔の下にお乳だけがピッチピチなんてえ」

「こええよ!! ホラーだよ!! でもおれらはそんなどうだっていいんだよ!!」

「ロリ顔に巨乳もある意味ホラーだと思うんだけどね、あたしは」

「エロアニメやエロゲーの異様なでかさも、実際に存在したらおぞましいですよねえ」

「ぼくの絶対聖域になんてことを!!」

「垣根の低い絶対領域だな、おい」

「そんなことよりさー。あたしも最近やばくてさー。ワイヤーなしじゃあーもう無理つて感じ?」

吠えたくる男どもをうつちやつて、遠野さんが大橋嬢にしみじみと言った。

「それはやばいですねえ。ちゃんと肉、かき集めてますかあ?」

肉？ かき集める？ 何を言っているの、この人たちは??

「ブラを装着するとお」

大橋嬢はやおら片手を上げて、もう片手を脇下に突っ込んで、ぐいと前に寄せ集めた。

「こうやって背中肉から脇下の肉まで、全部カップに入れ込むんですよ。下着売り場のお姉さんが教えてくれてえ。いきなり手え突っ込まれたのはびっくりしましたけどね」

「ほうほう、かき集めないと脇へ背中へ流れていつちゃうんだな」

お願いだ、もうやめてくれ。

村田君の願いもむなしく、女子二人はきゃっきやとガールズトークに花が咲く。

「湯船に浸かったら丁度いい形になるんですよ。浮力で」

「湯船といえばさー。うちのばあちゃんもでかかったみたいでー。幼稚園のころさ、一緒にお風呂に入ったんだよね。そしたらなんかしなびたもんが二つそよいでんの。あれってばあちゃんの胸だったんだねー」

村田君は目眩がしてきた。いや、これはさっきから飲み続けているハイボールのせいに違いない。きつとそうだ。

上野は果敢にも乳とはいかにすばらしいものかと力説していたが

「童貞が戯言ほざいてんじゃねーよ」

一刀両断、ばつさり切られて顔面蒼白、言葉を失った。

「夏草や、大馬鹿者どもが夢の後」

「遠野さん、なんか違いますよう」

留まるどころがさらに過激になってきたガールズトークを遠くに聞きながら、村田君は二度とこいつらと飲みに行くものとひとひそかに決意した。

作家とラップとイケメン助手（前書き）

遠野さんは今日も言いたい放題（心の中で）。

作家とラップとイケメン助手

大きな書店というものは、たまに作家を呼んでサイン会なるものを開催する。

成功すればみんなハッピー、客が集まらなければ非常にいたたまれない、チャレンジ精神溢れる素敵なイベント。

さて、遠野さんはその準備前の会場に立っていた。古いラジカセを持って。

本日のサイン会は大御所浜田詠美。

遠野さんが中高校時代、滅茶苦茶にハマった女流作家だった。

洒脱な文章、時に色っぽく、時に骨太に、大人の繰り広げる格好良く切ない別世界。いつかわたしも大人になったら……と憧れたものだが、気が付けば遠野さん、別の次元に着地していた。
おかしい。こんなはずじゃなかった。

まあ、ともかく、飲み友達の上司にお願いをして、お付きをさせてもらえることになったのである。コネは最大限に活用するに限る、と遠野さんはほくそ笑んでいる。

「あー、その君」

係長が手招きをした。

「そのラジカセをセットして、これ準備しておいて。先生、音楽流しながらサインする人だから」

「はい」

手渡されたCDを見て、遠野さんはしばらくフリーズした。

DJ KA・RI IN MIX。

いやいや、想定内だ。大御所様はクラブ系。もうお歳だけでもクラブ系。黒人の旦那様もいらっしゃる。

テストの為にかけてみると、思ったより大音量で曲が流れた。

「うおっ!!!」

その辺をうろちょろしていた上司方もびっくりしていて目を向いている。慌ててポリウムを絞った。

「かちよーかちよー」

直属の上司を発見して声をかけた。

「先生、もう着いているんですか？」

「うん。今、上でチューハイ飲んでる」
はい？

聞けば大御所様、サイン会の前は必ずチューハイ2缶のむらしい。ほろ酔いでラップ系ガンガン会場に流しながらのサイン会ですか。さすがというか、なんというか。

「結構、お客さん入ってますね。外まで並んでいますよ」

「百人くらいやるか」

おお。多いなあ。

そうこうしている内に、仕切っている飲みトモ上司が声を上げた。

「浜田詠美さんがいらっしゃいます！ みなさん拍手でお迎えしましょうー！！」

わー。パチパチパチパチ。

遠野さんもドキドキしてきた。

そして大御所様、ご登場。

意外と背は低い。若くもない。露出系服にしては、ポチャっている。だが、その存在感、プライスレス。

イケメン風の青年（きつと出版社の社員。けしてイケメンではない）二人を従えて浜田詠美は颯爽と歩いてきた。

「オーラって本当にあるんだなって思った。いや、あれはすごかった」

と、遠野さんは後日語っている。

ドンドコドンドコと大音量で流れる音楽、嬉しそうにサインを入れてもらっているお客さん、ご機嫌でしゃらしゃらとサイン入れる先生。その先生に笑っちゃうほど腰の低いイケメン風青年2人。

「あの、大ファンなんです！」

「どうもお〜」

「これからがんばってくださいね」

「どうもお〜」

「これ、よかつたら食べてください」

「どうもお〜」

この人、どうもしか言わないよ。

心の中で突っ込みながら、遠野さんはお客さんから本を預かる。

基本的にサイン会というものは新刊が対象なので「これ買ってくれたら引換券渡すよ」、手持ちの本は全て同じ。

お客さん（渡す）↓遠野さん（受け取る）↓イケメン？（広げてセ

ット）↓先生^{サインする}↓イケメン？（薄紙を挟んでお客さんに渡す）の流れ。

遠野さん、いなくてもいいじゃん。

時間内に無事終わり、作家先生は「どうもお〜」と言いながらご機嫌のまま帰って行った。

最後に遠野さんもサインしてもらった。

ところで遠野さんはその本を読んでいない。

「小説ってさー、同じ自分なのに読む年代によって受け取るものが違うんだよね。良くも悪くも。違った目線で読めたり、新しい発見があったり、こんなもので感動していたのかって冷めちゃったり。そしてやっぱり作家も人間だから、変わってくる。文体とか、テーマとか、流れとか。昔好きだった作家が現在書いたものを昔と同じ

ような感想もつのは絶対無理」
ということだ。

「いやー、その、あのー。5ページ目で脱落した」
だから、その本は今、本棚の隅っこに眠っている。

戦慄の午後（前書き）

遠野さんは今日もやる気ナッシング。

戦慄の午後

ストック。

遠野さん用語では「さぼり場所」。

返品作業だの整理してくるだのポップ作るだの様々な言い訳を用いては、モチベーションが上がらない時に籠る、素敵な場所。ちなみに遠野さんのモチベーションは退社前と休憩前にちよこつとだけ上がる。

「いいじゃん、ちゃんと状況見て行っているんだから」とは本人の言い訳である。

そういうわけで、今日も遠野さんはストックの汚い椅子に座って、2号カウンターの女子たちとおしゃべりに興じていた。

このストック、文具の3号と芸術書、ハードカバー、文芸を取り扱っている2号さんと共用である。こちらのカウンターは離れ小島とは違い、綺麗どころで有名でもある。

その美人さんたちが写真集をさばきながら糞味噌に批評する光景は一種、圧巻でもある、と遠野さんは思っている。

「うつわー！　ちちでつかー！　気色悪くくくー！！」

「顔は可愛いけど、ウエスト太い。よくこんなん写真出したな。尊敬するわある意味」

可哀想なグラビアアイドルたち。

まあ、大概に置いて女というものは同性に敵しいもんである。

まあ、それはともかくとして。

辛口美人さんたちときゃっきゃしゃべっていたその時。

天井の蛍光灯がパッパッパと点滅をした。

「わあ、電気またいた。寿命？」

何気なく遠野さんがいうと、美人さんたちは奇妙な顔をした。

「えー！　変なこと言わないでよ、ここ出るって噂なんだから」

うおおおおおう！！！！

ということは今、出たつてことですか！？

なんですか、蛍光灯またいたしたのはアピールですか！？

出る、というのは聞いた事がある。1日3万人から5万人ぐらい（えらいアバウトだなおい）の客が出入りするこの大型老舗書店、そりゃ人間じゃないのが混じっていても不思議ではない……かもしれない。

そういえば、入りたての頃、もうやめた先輩が塩撒いていたのを目撃した事があるな、その先輩は見えるって噂だったな。

ところでコク。の棚にアジ。オが置いてあつたんだけど（ひっそりと）、先輩はあれをまいたんだろうか。

てゆうか、。ジシオつて効果があるんだろうか……。

1人でガクガクブルブルとしていた遠野さんだが、美人さんたちはまったく気にしていない様子だったので「ま、いっか」とおしゃべりに戻った。

ちなみにその内容は「女性エッセイの3割が『前彼とよりを戻す方法』ってどうよ。そんなんだから振られるんじゃないか」というある種ガクブルなネタだった。

遠野さんの憂鬱（前書き）

遠野さんが新人に振り回されています。

遠野さんの憂鬱

仕事上がりの午後五時半。社員食堂の片隅、休憩コーナーで遠野さんはけだるげに溜息をついた。

お向かいには村田君がいる。こここのところ元気のない遠野さんを心配して……いるわけではなく、カフェオレ（お値段210円、高級品）で買収されただけの話であった。

「仕事を教えるのがこんなに大変だとは思わなかった……」

そう呟いて、テーブルに勢いよく撃沈した遠野さん。勢い良すぎてゴーンと音がした。

「あの……あの平成生まれめ……。どたまかち割って脳味噌引きずり出してやりたい……」

不穏な呪詛を吐く遠野さんの口元からは、不気味な白い魂が出ております。

「まあがんばればいっしょーけんめーやればけっかはついてくるって」

棒読みで適当に励ます村田君。

「わたしの一生懸命は空回りさ。カラカラカラカラああ、まるでハムスターの永久運動のようねうふふうふふあはははははは」

2週間がたち、ついに限界突破してしまった遠野さん。

懐のさびしい月末、飲みに行く金もないので、休憩コーナーでブリック片手に村田君に絡んでいる。

面倒くせえ、と思いながらも村田君はちよっぴり同情した。

今回入った新人ちゃんは、ちよっと特殊な人物であった。遠野さんはその教育担当を任されてしまったのである。教えることはたくさんある。基本を覚えてしまえば、後はニュートラルに動けるのだが、そこまでが大変なのはどの仕事でも同じだ。

初日に事務所で研修を受けた新人ちゃんは、そのまま担当者に連れられてカウンターに挨拶にやってきた。

まずその格好に文具売り場の面々は度肝を抜かれた。

某ツンデレヒロイン如しのツインテール（これはいい）、

ゲジゲジのような付けまつ毛（これも大丈夫）、

厚さ五ミリもあるうかという厚化粧（許容範囲）、

そして露出度激しすぎるパンクファッション（↑ここ重要！）！

あんたそれ仕事しに来たファッション違うだろ！ 普通、スーツだろう！

ニュータイプ！ いろんな意味で違うけどニュータイプが今、ここに！

心の中で絶叫しているスタッフに向かって新人ちゃんは超メガど級の挨拶を放った。

「ちいーす」

ニッポーンホウカイ。

この時、上は64歳（次長）から下は22歳（大橋嬢）まで、真剣に日本の将来を憂えたという。

「教育の担当者、どうする？」

「あたし、嫌ですよ。あんなの」

「よし、遠野にしよう」

「そうしよう」

「きーまった」

「今日、休んでいるあいつが悪い」

そんなわけで、遠野さんが教育担当する次第となったのだった。

だがしかし。

「あたし、昨日それ教えたよね？ メモ取ってって言ったよね？」

「とったけど、どこに書いたか忘れちゃってエ。てか、怒ってる？」

当たり前だ、めちゃくちや怒ってるわ！ とは内弁慶外地蔵の遠野さんは中々言えない。

新人ちゃんが失敗しても、顔を引き攣らして注意して、「次から気を付けてね」というくらいである。そもそも、新人が失敗するのは当たり前だし、教育担当はそのサポートをするのが仕事。だけど「

がんばって気を付けても間違える」と「最初からやる気がなくて失敗してもフォローしてもらえ」はベクトルが全く違う!!

そして文具売り場は基本的に新人放置で有名なカウンターでもある。上から下まで一丸となるのは、年に一回に開催されるかどうかの飲み会のみ。後は困ってようが客に絡まれてようが、基本的に見物のスタンスを取る。実質、遠野さんも入ってばかりの頃は教育担当が自分の仕事でいっぱいだった(手帳立ち上げの季節だった)こともあって、野育ち同然で育ったクチだ。とにかく必死だったし、お客さんにもいっぱい怒られたし、なにより村田君の存在が大きかった。「あまりにも必死すぎて見てられなかった」そうだ。

「ねえ、村田君」

撃沈していた遠野さんが、ふと顔を上げた。額が赤くなっている。

「んー？」

「リア充ってなあに？ リア王の親戚？」

「は？」

ハブるわけにもいかない昼休憩で彼氏彼女の話になったらしい。彼氏がいると言った遠野さんに向けられた新人ちゃん言葉が「へー。意外とリア充なんだー」。どうやら褒め言葉のようだと受け取った遠野さんは礼を言った。

「お前、パソコン持つてくるせにネットスラングはからしきだな」

「む。それくらい分かるわい。ええと、ドンクでしょう……」

「DONな。それ、某有名パン屋に対して失礼だから」

村田君はリア充について、説明をしてあげた。聞いて遠野さんは怒髪天をついた。まるでサイア人だ。

「そんな人間、世界に一握りしかおらんわ！ 第一、彼氏がいるっぼっちで人生充実してたら苦労せんわ！」

「俺に言われても」

「だいたい注意しても注意してもあたしに敬語を使わないんだ、あの小娘！ こちらとら先輩だぞ、もつと敬えうやま あが崇めたてまつる奉れ！」

「お前はあれか、神か何かか」

呆れた村田君はふと気が付いた。

「ていうか俺もお前の先輩なんだけど」

「そもそも何であんなのが面接通ったんだっつーの！」

「うわ、しゃらつとスルーしたよ。この女」

「もうやだー！ 仕事やめたいー！」

ついに足をバタバタさせて駄々をこね出した。

「はいはい、お前がやめた所で何も変わらんからな。好きな奴とだけ仕事できる訳じゃないし、そんな甘えた理由で逃げたら、これから先、しんどいぞ」

「正論言う男はもつとやだー！」

いいこと言ったのに、遠野さんに蹴られた村田君。210円の каф エオレでは割に合わない、と呟きながら蹴られた足をさすった。

ところでその新人ちゃんが入って3週間目で、いきなり消えた。

開店時間を過ぎても出勤してこなかったので電話をした所、「あー、何か合わなかったんでやめまーっス。プチッ。ツーツ、ツーツ、ツーツ……」。

彼女は文具カウンターの伝説になった。

文具カウンターがある限り、永遠に語り継がれるであろう。語り手はもちろん遠野さんだ。

オタクと砂漠と村田君（前書き）

女子の会話はたいがい、そこにいない人が話題になる

オタクと砂漠と村田君

「今日も暇ですねえ」

とある昼下がり。社員食堂で遠野さんと大橋嬢はランチを取っていた。

遠野さんは薄っぺらい牛肉が数枚入ったカレーライス（なぜかうまいんだこれが）を、大橋嬢はご母堂お手製のカラフルなお弁当をついている。

「嵐の前の静けさだよ、もうすぐ手帳立ち上げだよ、年末がくるんだよ、恐ろしいよ」

「村田さんはいい時期に休んでくれましたねえ。さすがというかなんというか」

文具カウンターのベテランアルバイトの一人である村田君は、ただいま6連休中だ。

「どっかいくの？」遠野さんの問いに帰ってきた答えは一言「砂漠」。

「砂漠つてのはあれかね、鳥取でも行つてんのかね」

「あれは砂丘です。砂漠じゃありません」

大橋嬢はおごそかに訂正した。

「海外ですよ。なんか事務所に書類を提出してましたもん」

村田君は基本的に流浪の人である、というのが皆の共通意識だった。ある程度の金がつまると一週間くらいの休みを取ってふらりとどこかへ旅に出かける。

「そういうのって普通の会社だったらできないよね。だから26になつてもアルバイトしてんのか」

「和泉君も同じ理由だと思いますう」

和泉君は基本的に芝居の人である、というのが皆の共通認識だった。やれ公演だ、稽古だ、と忙しい月には有給総動員して演劇に勤しん

でいる。

普通のスタッフのシフトはだいたい3日出勤して1日休むパターンを基本としているが、彼の場合は10日出勤して3日休む滅茶苦茶なシフトである場合が多い。

しかしあれだねえ、と遠野さんは米粒一つ残さず平らげて、満足げに腹をさすった。

「うちの男子はみんな夢追い少年だねえ」

「それは次長課長も含まれますかあ？」

にやにや笑いながらタコさんウィンナーを口に入れた大橋嬢に、遠野さんは深く頷いた。

「うん、こないだ課長に『将来の夢はスナイパー』って大真面目に言われた」

「うぐっ！」

タコさんは喉元にひっかかったらしい。が、大橋嬢はどうかタコさん噴出を堪えることに成功した。

「か、か、課長っていくつでしたっけ……！」

「たしか55……いや6だったかな。次長なんてあの自由さ加減がもう少年じゃん」

「そうですねえ。上野もアニメの話する時はもう子供みたいに目エキラキラさせてますしねえ」

上野は基本的にオタクの人である、というのが皆の共通だった。漫画、アニメ、ラノベ分野のメジャーからコアまであらゆるジャンルを網羅する。「上野のオタクはよいオタク」と評されるものの、誰もついていけない、ついていく気もないのが残念だ。

ちなみに場所柄か、スタッフはある程度のオタク気質を持ち合せている。

遠野さんは毎週木曜日は6時スタートのアニメを見る為に飛んで帰るし（録画をしてもリアルでみたいらしい）、課長の携帯ストラップは海賊王志望の某妻わら少年だし（尻ポケにいられているため、いつも足だけが2本、によつきりと出ている。まるで犬神家の湖畔

の逆さ死体状態である）、次長は一時期、「もやしも。」にはまり、「かもすぞー、かもすぞー」とうつとおしかった。

大橋嬢も負けてはいない。普段はノーメイクで出勤しているが、お気に入りビジュアルバンドのライブ時はゴスロリ娘にモードチェンジ、一度コルセットを締めすぎて（+興奮しすぎて）酸欠になり、ひっくり返ったことがある。

また、遠野さんが支店から貰ってきたクラ。ザーさん（DMC）のクリアファイルを「誰かいる人」と掲げた所、希望者多数、壮絶なじゃんけん大会に発展してしまった過去だって存在する。一度はおいでませ、ディープな文具売り場。

「まあ、なんにせよ」

ランチをすませてブリック片手に休憩コーナーに移動した2人は、同時に脂取り紙を取り出した。ペタペタ脂を取りながらくつつやる。

「訪れた砂漠でジュリエットに出会えるといいですねえ」

（村田君は、声楽やっていた彼女に「あっちゃんはおミオぢやない！」とふられた悲しい過去を背負っている。「バカップル選手権」参照）

「誰もいない砂漠、一人もくもくと砂を掘る村田君」

突然、創作モードに入った遠野さんに、大橋嬢ものつかってきた。

「スコップ（シャベルだろう）先に何かが当たった。それは黒い棺だった」

「おそろおそろ棺を開けると、そこには目も覚めるような美女の遺体だ！」

「『楼蘭の美女』ですね！ 遺体はまったく傷んでなかった。おそらく身分の高い貴族の娘だったのだろう」

「羽織っていた唐草模様の衣は外気にふれて、サラサラサラと細かい粒子になって散っていつてしまった。光る粒子の粉を纏い、ただ眠れる美女を見つめる村田君」

「ところがその時！『主人の眠りを妨げるのは誰だ』。低い声が聞こえ、振り返ればそこには無数のミイラが！！」

「村田君、焦る！しかし武器になるものはスコップ（だからシャベルだろう）しかない！」

「ぜったいぜつ……きゃー！遠野さん！45分とつくに過ぎてますうー！」

遠野さん大橋嬢、焦る！2人はあたふたと席を立った。

「どうなる、村田君！絶体絶命、大ピンチ！」

「続きはウエブで！」

はい、続きません。

慌ててカウンターに戻った遠野さんと大橋嬢は、社員の北さんからお小言を頂戴した。

その後、あらためて村田君の「砂漠のジュリエットとの邂逅」を祈り、どこかの砂漠に向かって合掌した。

恋せよ男子！（前書き）

がんばれワカゾー！

恋せよ男子！

「遠野さん」

終業時間一分前、パソコンのタイムカード前でスタンバっている遠野さんに上野が声をかけた。

「今日、ちよつと飲みに行きませんか？ 話、聞いてもらいたくて……」

「えー。イヤダ」

画面から目をそらさずに、遠野さんはすげなく断った。カウントダウンが始まっているのだろう。

「おこります」

「しょうがないな、上野君！ おねいさんが付き合ってあげるヨ！」
くるりと振りかえってにつこり笑った、その身の変わりやすさが遠野さんクオリティ。

「ああ、5秒ロスした」

猛烈な速さでパソコンのテンキーで社員番号とパスワードを入力すると（遠野さんたちは会計の際、書籍の様なバーコードなんてハイテクなものではなく、値段を子機のテンキーで打つ。だからベテランになればなるほど叩くスピードが速くなる）

「着替えてくるから、B2で待つてな。じゃ」

とうていおごつてもらう立場の言動とは思えない、えらっそうな態度で遠野さんはカウンターを出ていった。

「お先に失礼しまーっす」

出勤時はダウナーで退勤時にはアッパーになる、そんなところも遠野さんクオリティ。

別名、低クオリティともいう。

さて、上野のお財布の事情に合わせて、高架下の焼き鳥屋へ繰り出した2人。

「おっちゃーん。生中2つねー!」

「あいよう!」

おしぼりを拭きながらねじり鉢巻きのオヤジに注文する遠野さんは、となりのリーマンと比べても遜色ない。「親父」と同化する彼女は、たまに女友達（可愛い）と飲むと、なぜかとなりのテーブルの男たちがおごってくれたりすることに、本気でジェラシー感じている。

「で、なに？ 相談って」

おしぼりで手を拭いた遠野さん。本当は顔も拭きたかったが、あえて我慢した。

「あのですね……実は、こ」

「あい、生二丁ー!!」

ぐいんと延びたオヤジの手に上野はのけぞったが、大人しくジョッキを受け取った。

「あ、注文いいですかー？ キモとカワとズリとボンジリとネギマとセセリとナンコツを塩で2本づつ。あとシシャモとアツアゲポン酢で。はい」

好きな分だけ注文すると、メニューを上野に渡す。

一般女子のように「えー、何にするー？」とメニューを覗きこむ様な可愛らしさは遠野さんにはない。残念。

「あ、えと、鳥のから揚げを……」

「あいよう」

オヤジが笑顔で引っ込むと、遠野さんは上野に中ジョッキをガンとぶつけた。

「うーい」

カンパニーとはしゃぐような年頃の娘さんの様な愛くるしさも遠野さんにはない。哀れ。

「あの、実は相談事というのはですね」

冷たいビールで喉を潤した上野は、決意したかのように、うん、と背筋を伸ばして遠野さんを見つめた。

「恋をしています」

「へー。それどんなギャルゲー？」

「いや、そうじゃなくて……！」

「あ、エロゲー？ よく分かんないけど頑張つてアドバイスするよ。なんつたつておごりだし。おっちゃん、生追加ー！」

「じゃなくて！ リアルに好きな人がいるんです！」

「えっ！」

空のジョッキを掲げたまま、遠野さんがフリーズした。一面のお花畑で微笑むプロレスラーを眺めるような顔で上野を見つめている。

つまりは信じられないようなものを見た時の眼差し。

「この間、入ったばかりの、Mさんを好きになっちゃったんです」

「あ、あんたそれマジで言ってるの……？」

遠野さんの顔が驚愕に変わった。浮いたままのジョッキはオヤジがそっと回収した。

Mさんは遠野さんが教育担当している新人ちゃんである。小柄で細身で全体的にちっちゃい、いかにも「女の子」な女の子である。

入った当初、遠野さんと社員の北さんは「素直な子が入って良かった」と胸をなでおろしていたが、実は結構、灰汁の強いおにやのこだった。

「彼女はテンパリスト」

略してテンちゃん、と遠野さんが命名したほど、よくパニックになる。一度、ツボに嵌ると抜け出せない性質らしく、彼女が発動するうっかりやテンパリに巻き込まれた人間は数知れず。

一番近い所にいる遠野さんも被害は甚大で、テンちゃんがうっかり捨ててしまった領収書（領収書を発行する時は、引き換えにレシートを冊子に貼らなければなりません）控えのレシートを探してゴミ箱を漁ったことがある。しかもその日は自分の誕生日だった。

本人も気にしていて「どうせわたしなんて」と落ち込むのを遠野さんが「新人なんだから間違えるのは当たり前だよ、でも気を付けてね」とフォローしていた。

どこか危うくて、ほっとけない感じ。そんな可憐さが上野の心臓を

打ち抜いたらしい。

「なんていうか……ゴリラの群れの中に、チワワが一匹紛れ込んだような……ハウチ！」

「誰がゴリラだ鼻フックくらわすぞ」

上野の腕を捻り上げた（スクエアカットの爪の角っこ使用。めちゃくちゃ痛い）遠野さんは、アツアゲをつまみながらしみじみと言った。

「しかし、上野はどこまでも二次元ラバーだと思っていたよ。現実に人を好きになるなんてありえるんだね。めでたいね、こりゃ」そしてやおら顔を上げ、

「おっちゃん、お赤飯ある？ あ、やっぱりない。いいいいいよ、小豆でも。ライスシャワーでも新郎新婦に米ぶつけるじゃん、あの要領で……えーダメ？」

「遠野さんお願いばくに小豆を撒かないで！」

オヤジと上野にNGを出されてぶんむくれた。

「テンちゃんもいい子だけど天然入ってるから、大変だよー。あの細さで『まだやせたい』っていうんだもん。嫌味かってム力ってたけど、本気でいったんだよね。いやー、びっくりしたわー。というわけでがんばってね」

「がんばる方向が分らないんです」

上野は小動物のようにジョッキを両手に持って、こくりとビールを飲んだ。

「ぼくはどうすればいいんですか？ まずは給料3ヶ月分の指輪を買ってお付き合いを申し込めばいいのはわかっているんですけど、そこからが……」

「いやいやいやいや、それ全てを通り越してプロポーズだから！」驚きのあまり立ち上がった遠野さんが突っ込んだ。

「てゆうかいきなり指輪なんて、普通ドン引くから！ ダメゼツタイ！」

「えっ……。でもこの間クリアしたエロゲーじゃ、そういう設定で

……」

「おバカ！ なんでもありのファンタジーゲームが現実に通用的と思うな！」

「じゃあ、どうしたらいいんですか！」

「簡単じゃん、そんなの」

どっかり椅子に座った遠野さんは明言した。

「好きっていえばいいじゃん。ダメだったらふられてジ・エンド、オツケーだったらお付き合ひ。はいこれですつきり解決」

「ふられるのが嫌だから相談してるんですよー！ー！」

今度は上野が激昂してスタンドアップ！

「それにMさんとの間が微妙な空気になったら、ばくいたたまれない！ そんな辛い思いするのやだ！」

「だまれこのヘタレ童貞チキン野郎！」

鶏肉が一個のこったままの串をビシッと上野に差し、遠野さんも応酬する。

「男ならうじうじ悩んでないで、スパーンと告れ！ そして玉砕しろ！ 砕け散れ！ー！」

「なにげに敗北前提じゃないですかー！ー！」

お客さん、もちよつと声落としてね、とオヤジに注意され、上野と遠野さんは我に帰った。

店中のリーマンたちが微笑ましそうな顔で見物している。

いいねえ、若いねえ。

そんな彼らの声が聞こえてきそうである。

「すみませーん」

「ご迷惑おかけしましたー」

方々に頭を下げた2人は、大人しく飲み始めた。

「あたしさ、上野ってテンちゃんのこと、きらいなのかって思ってた。だって2人が会話しているとこみたことないもん」

「意識しすぎて、何話したらいいか分からないんですよ……」

もう、しょうがないな、と遠野さんは溜息をついた。

「今度、3人でのみにいこ。いきなり2人よりはハードル低いでしょう?」

「ありがとうございます! 恩に着ます!」
律義に上野が頭を下げた。

「あと、できればさり気なく指輪のサイズを聞いてもらえませんか?」

「まずは指輪から離れろ!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7967o/>

文房具売り場の遠野さん

2011年10月7日14時19分発行